

読書通信



No. 128

① 集团的自衛権関連法案がとうとう成立してしまった。先の総選挙では全く話題にもなっていなかっただけに国民の信任を得た上での立法とはとても思えない。田中秀征『保守再生の好機』（ロッキング・オン、1296円）はまことにタイムリーな刊行である。「良質な保守は何よりも民意に立脚する。…いかなる場合も『法の支配』を貫徹する。外交面では…国の独立性を断固として堅持する」（まえがき）はまさにそのとおりだが、実態はまるで逆だ。

「解釈改憲は邪道」に始まり、集团的自衛権

ペリリユーやサイパン個々もいいが、海域としてとらえてみることは重要である。

井上亮『忘れられた島々―南洋群島』の現代史』（平凡社新書、820円）は南進ブームから戦時下の実情、戦後の水爆実験被害、引揚者対策や現地支援に至るまで波乱の1世紀が詳細に述べられて、何が問題だったか、そこから今何を学ぶべきかが明らかに。「忘れ」てはいけない島々がそこにある。

③ 文庫化されて1年近く、買い求めたままになつていたNHK取材班『日本海軍400時間の証言』（新潮文庫、810円）を今頃になって読了した。500ページというボリューム感もさることながら、かつての海軍士官たちによる「海軍反省会」の内容を追跡し、確認、展開する

の危険性からイスラム対応、ナシヨナリズム、憲法観、統治構造と選挙制度の改革など内容は多岐にわたり、「理想の保守」と「保守の劣化」が明快に論じられる。質問に答える形式のためもあってとても読みやすい。法案が成立してもこれで問題が片付いたわけではなく、日本という国をどういう方向へもっていこうとするか考える上で傾聴すべき良書、というよりも必読の書である。なお、この問題は自衛隊の実態を知らずに議論するわけにはいかない。その意味では瀧野隆浩『自衛隊のリアル』（河出書房新社、1512円）の併読をお勧めしたい。

② ミクロネシアと呼ばれる南西太平洋の広大な海域には、日本が経済的軍事的に進出し、戦禍が拡大し、戦後はないがしろにされてきた。

スタッフの努力に圧倒された。開戦も海戦も特攻も無責任の極みで遂行されたことが白日の下にさらされる。反省会で告発された「海軍あつて国家なし」「やましき沈黙」など旧海軍の無責任の連鎖は70年前だけの話ではない。新国立競技場やエンブレム問題一つとっても、海軍士官たちの反省はそのままではまると言えるのではないか。番組の再放送が待たれる。

④ 最後にやや気軽な本を。武光誠『地形』で読み解く世界史の謎』（PHP文庫、799円）は地形や気候によって文化や産業がどう形成されたか、中国王朝、イスラム世界、朝鮮半島、アメリカ南北大陸などさまざまな具体例を大量の地図によって説明している。地勢的に世界史を復習したい人には手頃な一冊である。（純）